
藤森優斗 歌詞集 ユメノナカ

藤森優斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

藤森優斗 歌詞集 ユメノナカ

【Nコード】

N8633D

【作者名】

藤森優斗

【あらすじ】

『奏でる音の色』詞に載せた想い』の主人公、藤森優斗の歌詞集。話の中では登場しないけど、確かに書かれた歌詞を載せています。ストーリーとかではありません。ただ、詞で心が動いてくれたら、と思っています。

ループホール

ループホール

「何をしたって 後悔一つしなければいいな」

そんな人生を望むかい？ でも それじゃ 涙の意味がない

「わがままばかり叶えて 幸せになりたい」

それを叶えてどうする？ もっと 叶えるべきモノがあるだろう

夢ばかり見てきた だから 君の視力は落ちていった

現実を見付けられない それでいいでしょう？ 夢から覚めるくらいなら

ループホール

逃げ道探して 迷いに迷い 辿り着いた

ずっと 目指した場所は 道無くとも 可能性で繋がっていた

ループホール

居場所を求めて 回りに回る 苦労の中

本当に 大切な物は 探さなくても 確かに此処にあった

誰かに貰った夢の中で 死ぬなら 構わない

「何を選んでも 全部当たりならいいな」

そんな選択肢が良いかい？ でも これまた 涙の出番が無い

「曲がりくねった気持ちじゃ 針の穴通らないよ」

鋭く尖った気持ちなら 不可能でも突けるだろう

夜ばかり泣いてきた だから 夜は長く感じた

何度も目覚めなく朝が来た それでいいでしょう？ 想いを忘れる

くらいなら

ループホール

「まだ大丈夫……」 悩みに悩んで 乗り越えた

ずっと 積み重ねた不安は 笑顔の度にダルマ落とし

ループホール

涙の跡を 頼りにして 歩いてきた

その途切れ途切れに落とし 過去の自分とにらめっこ

頼った割には役に立たない 思い出の振りだけ

忘れる事が出来たなら

逃げ道なんて探さないのに

出会う事が無かったなら

別れる辛さ知らなかったのに

現実すら見付けられない それでいいでしょう？ 夢を失うくらいなら

ループホール

逃げ道探して 迷いに迷い 辿り着いた

ずっと 目指した場所は 道無くとも 可能性で繋がっていた

ループホール

居場所を求めて 回りに回る 苦労の中

本当に 大切な物は 探さなくても 確かに此处にあった

誰かに貰った夢の中で 死ぬなら 構わない

自分で作った夢の中で 死ぬなら 構わない

ループホール（後書き）

藤森優斗。 1 作目。 人の夢を描いた作品です。

神のルール

神のルール

産まれてきた奴等は 全て神に選ばれた

「何処かしら冴えた部分があるだろう」と適当に

産まれて来る時 幾つか神に問われた

「産まれた分、最後の最後に何を知りたい？」

そして僕等は死を選んだ

別に嬉しくはない

貰った命の分 苦労はそれを越えるだろう

でも 気付いていた

知った苦労の分 幸せの価値は増す事

何が怖くて 孤独を愛する？ 何が怖くて 光を遮る？

神は更に決まりを定めた 「寂しい」という感情を

一人でなんか生きないように

生きている奴等を いつも神は眺めている

何か外れた事をしたら 一層の事 殺す気で

産まれて来る時 幾つか神に問われた

「疲れるから、心臓の期限を決めようか？」

そして僕等は「はい」と答えた

特に期待はしてない

命を削った分 優しくはされないだろう

でも 分かっていた

代償がなくても 優しさは貰えるって事

何が不安で 死を嫌がる？ 何が不安で 無くして泣く？
神はまた決まりを増やした 「愛しい」という感情を
他人を必要とする為に

誰が作ったルールだろうと
守れる奴は一人もいなかった

産まれたから 神を知ったよ
選ばれた理由は死ぬ必要があったから
生きたから 闇を知ったよ
真っ白に澄んで 何処までも見えない闇

誰一人として 一人では生きられなかった
そのルールだけは 確かに守った

何が怖くて 孤独を愛する？ 何が不安で 無くして泣く？
神は最後の決まりを作った 「さようなら」という言葉を
最後は一人になれるように……

神のルール（後書き）

2 作目。人は誰かが居ないと死んでしまう性質を持っているようです。

ハローバイバイ

ハローバイバイ

壊れた額の中 綺麗に並べた思い出が
キラキラ輝いて 微かに照らす
悲しみのチューブ 握り潰して出た
絵の具の色は 涙の色の如く

媚びれ付いたシミを擦っても 汚れが増えていくだけだった
孤独に良く似た空を見上げたら 汚れたシミも小さいモノなんだ

この世界の中に産まれて来た事を
後悔する事は無い
誰かの期待に 答えられるような
輝かしい命じゃない

歪んだスピーカー 助けを求める悲鳴が
キンキン響いて 僕を呼ぶ

幸せの形を良く知らないから 探す事になかなか慣れなくて
「ああ、ふざけるな」って懲りた事言ったら 消えて狂いそうな幸
せだった

この世界の中に産まれて来た事を
後悔する事は無い
血溜まりの中で 生きてるような
生臭い世界でも

愛したい 愛したい

嫌々 生きてるこの世界を

愛したい 愛したい

嫌々 繰り返す呼吸を

新しい ハロー 消えていく バイバイ

今日の ハロー 夜明けの バイバイ

「死にたい」なんて言ってる暇は無い
生きてる この一瞬 一秒に懸ける

この世界の中に産まれて来た事を
ずっと感謝するんだ

腐っていく命 見届ける前に

この想いを 叫べ

蹴り上げた大地 やがて消えるのなら
駆け抜けるしか方法は無いようだ

星屑カ斯塔ネット

星屑カ斯塔ネット

深夜の深い闇の中 右手と左手を繋いだ 二人が空を見上げる

「今日は綺麗な星空だね」と彼女は星より キラキラした目で彼を見る

手作りした自慢のプラネタリウム 彼女に見せびらかせて鼻を高くしたけど

何光年の歴史が作った 夜空に広がるプラネタリウムには適う筈もない

一緒に見上げた星は 二人を照らすような
舞台照明にも劣らない 綺麗な光だった

「この星は忘れない」と彼女は優しく笑った
忘れる訳が無い 忘れやしない
例えこの星を忘れても 二人はその時を忘れない

突然降り出した雨の中 二人は同じ足音立てて 走り去っていく
「天気予報で言ってたよね？」と彼女は雨宿りの木の下 溜め息混じりに言う

繋いだ手が教えてくれた 震える左手を
試行錯誤する暇も無く 二人は抱き合った

「私は貴方が好き」と彼女は照れて呟いた
答える事が出来ない 答えたいけど

君の目元に雨ではない 雫が確かに光ったから

返事を返すよ 彼もずっとずっと

返事を返そう 彼はずっとずっと

見詰めた瞳がキラキラ光って 星よりの眩しいさを

何光年も離れていても 近くにある想い

「僕は君を忘れない」と彼が小さく呟いた

忘れる事は無い 忘れやしない

だから思い出じゃなくてこの時を 「イマ」を二人は過ごした

雨も止んだ新しい朝 繋いだ右手と左手 離れようとしな

二つで一つのモノの様に 最初っから繋いであるのが 当たり前
のよう

エンゲージリング

エンゲージリング

きつとさ 僕等

産まれる前にも会ってたでしょう？

そうでもないよ 君を見た時の気持ちの説明が出来ないよ

やつとさ 僕等

産まれて巡り会えたでしょう？

生きてきたから 約束していた君と姿を持って会えたよ

初めて見た でも 知ってる

これを『運命』と呼ぶのでしょうか？

約束した でも 忘れた

だから『偶然』と呼ぶのでしょうか？

えーとさ 僕等

知らない内に何処かで会ったでしょう？

「初めまして」 そんな言葉も思い浮かばなかったよ

あのね 僕は

最初から君に会おうとしていたよ

何億の選択肢から迷わず君を選んだから

外れた？ でも 当ってる

どれを引いても君に会うでしょう

外れた？ でも 当ってる

どこを歩いても君に会うでしょう

君と手を繋ぐ為に 僕の右手は付いたんだよ
君を抱き締める為に 僕の両手はあるんだよ

例えばね 何億の選択肢の内 君の姿が見えなくても
僕は大丈夫だよ 心配は要らないよ
目隠ししてでも 君を選ぶ事が出来るから

だってさ 僕等

産まれる前にも会ってたでしょう？

それならば 君の鼓動とか声とか香りとか呼吸とか

その全て 僕は知ってるよ

忘れた でも 知ってる

これを『思い出』と呼ぶんでしょう？

忘れない でも 忘れない

これも『思い出』と呼ぶんでしょう？

会いたい でも 会えない

それも『運命』と呼ぶのでしょうか？

会えない でも 会いに来た

それも『運命』と呼ぶのでしょうか？

全ては僕が選んだんだよ 選択肢を運命と呼んで
僕は君を選んだよ 君は僕を選んだよ

孤独の森

孤独の森

脳裏に広がる 言葉の空

無駄なモノばかり浮かんでる

キラキラ 言いたい事ばかり光ってる

孤独が重なる 一人の森

何もかもいらない振りして

ジロジロ 他人を気にして怖がってる

意味の無い 劣等感ばかり覚えて

大事なモノは全て 見落とした

何もかも

誰だって……

この世界に生きる「それだけでいい」と呟く事すら出来ない
伝えたい気持ち言葉じゃ伝わらないから 僕等は何度も迷った

希望に人任せ 時には運任せ

誰にも頼らない振りして

何故だよ 自分が一番頼りないだろ

くだらない 謔言を舌で転がして

大切な事は何一つ 分かっている

何一つ

僕もまだ……

この世界に生きる「それだけでいい」と呟く事すら出来ない
届けたい言葉が引つ込み思案だから 勇気って力を作った

進化 情報 情報

新たなエネルギー 便利な生きにくい時代

進化 情報 情報

未知のテクノロジー 楽して生きにくい時代

この世界に生きる

この世界に生きる

「死にたい」なんて絶対 口に出すな

この世界に君が 必要だから

生きてる意味がある

誰もがずっと……

鼓動が尽きるまで「生きていたい」と喉が哽れても叫べ
言葉なんか無くても伝わる想いはある

君もそうやって この世界で……

この時代の中で

心臓のリズムが鳴り響く 神経のイヤホン繋いで

隠す所だらけの世界に隠れずにいる

君もそうやって 僕もそうやって

この世界で この時代で 生きている

瞼に映る言葉

瞼に映る言葉

桃色の花びらが散っていく空
ひらひら、と回り回って
手のひらに舞い降りてくる

真冬の季節が訪れた頃
しんしん、と積もり積もった
真っ白な雪と君への想い

ずっと ずっと 近付きたくて いつも 君を見ているよ
もっと もっと 見ていたくて 瞼の裏でも 見詰めるよ

君の好きな あの唄も
君の嫌いな あの言葉も
全部 全部 君を作っているモノ
君を形付けるモノだよ

茜色に染まって広がる空
カーカー、とカラスの鳴き声
君のもとに帰る合図

待って 待って 君は何処？ いつも 君を見ていたいよ
もっと もっと 見て欲しくて 瞼の裏に焼き付けて欲しくて

君の笑った あの笑顔も
君の泣いた あの涙も

ずっと ずっと 見れないよ
そんなの悲しすぎるよ

君が嫌いな あの言葉を
僕はずっと □ずさむよ
嫌でも 嫌でも 今、□ずさむよ
「さようなら」と泣きながら

いつか 君が嫌った言葉
「さようなら」は嫌いだと
だから 僕の好きな言葉
「ありがとう」と笑って

ひらひら、桜の季節 散る事の悲しさを
ひらひら、桜の季節 咲く事の嬉しさを
しんしん、真冬の頃 融ける事の怖さを
しんしん、真冬の頃 積もる程の想いを

君の好きな あの唄に
君の嫌いな あの言葉を
いつも いつも 混ぜて歌うよ
君が居た証拠として

君の笑った あの笑顔も
君の泣いた あの涙も
全部 全部 君を作っているモノ
君を形付けるものだよ

無駄なモノなんて1つも無い それが必要だから そこにある
雪が解けて 消えていっても まだ 解けない 想いがある

約束の唄

約束の唄

それじゃあね 此処で別れようか
今まで一緒だったけど もう 離れないと
それでもね 少し悲しくなるよ
本当に少しなんだよ 涙止まらないけど

側に居た分 同じ想いがある それは嘘じゃないだろう
だけど 別れよう もうその時だよ
君みたいな奴 大嫌いだ

忘れないよ 忘れられないよ
その時間があったという事は
生涯 君と会うことはないのかも
それでも それはいい事なのかも

よし じゃあさ もし会えたとして
もしもだよ 君と会えたとしたら
そりゃさ 涙も会いに来るよ
仲良く三人 輪の中 本当に仲良しさ

君を避けた分 笑顔が増した その時 気持ちが高かったよ
何故だろうって 何故なのかって
君みたいな奴 邪魔なだけさ

見付けられない 見付けて欲しいよ
逃げた末に辿り着いた君の中

人生 そこは僕等の住処
それでも 涙は流したまま

上手くいかない 上手く出来ない どうにも出来ない
だから 逃げて走り回って 君の手と握手を交わしたよ
仲良くしていたいけど それじゃあ 駄目だって知ってるから

じゃあね 君の名は「独り」

忘れないよ 忘れられないよ
君がすぐ側に居たことを
今でも ずっとそこにいるよね
たまに君に出くわすから

忘れないよ 忘れられないよ
今更 人は逃げられない
君に会わない人なんていない
そりゃ 僕だって そうさ

それじゃあね また いつかお世話になるよ
それじゃあね 嫌いだよ 君みたいな奴

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8633d/>

藤森優斗 歌詞集 ユメノナカ

2010年12月10日18時58分発行